

## 学校生活における上履きの変遷とその役割

吉田 智美\*・河村 美穂\*\*

キーワード：上履き、学校生活

### 1. 研究目的

家庭科は生活を対象とした教科である。モノや人との関わりについて現実にある事象を題材としながら、社会との関連について考え、学習者自らの生活について考える教科である。家庭科教育に関する研究は、その多くが教科内容と指導方法についてであり、実践との関連をはかりながら研究がすすめられてきた。とくに教科内容に関する研究では、家政学の研究を背景として生活上のモノ、人についてどのように学ぶのか、何のために学ぶのか、家庭科教育独自の教育学研究がすすめられてきた。

一方、家政学研究ではこれまで衣・食・住に関わる様々なモノに関する研究が行われてきている。

しかし、以上の家庭科教育に関する研究においても、家政学研究においても、学校生活におけるモノの研究はほとんど行われてきていない。これは、学校生活で使用されているモノが日常的な学校生活においては当たり前すぎることから研究対象となりにくかったためではないかと考えられる。また、その多くが大きな変化もなく使用されてきていることから見過ごされたとも考えられる。たとえば、ランドセル、上履き、

体操服、給食服などは、材質の多少の変化はあるものの、10年、20年前と大きな変化は認められない。しかし、これら当たり前のように使用されているモノは学校生活の質に影響を与え、学校文化を形づくる重要なモノであると考えられるが、学校文化に関する研究においても、ほとんど研究対象とはみなされていない。先行研究としては、天野らによる労作があり（天野他、2007）、子どもが使うモノの戦後史が明らかにされている。ただし、取り上げたモノの数が多く、一つ一つのモノの歴史の変遷を明らかにしたものではないことから、個々のモノについてより詳細な検討が待たれるところである。

そこで、本論は、学校生活の中で当たり前で使用され、とくに研究対象として注目を浴びることもなかった上履きについて、あらためてその歴史の変遷をあきらかにし、その役割を明らかにすることを目的とする。ここで、上履きを研究対象とした理由としては以下の3点が挙げられる。まず1点目として、概観した限りでは日本全国ほとんどの学校で上履きが使用されているということである。2点目は、だれもが、毎日の学校生活で小学校から高校まで長期間にわたって使用していることである。3点目は、上履きをモノとしてみた場合に、この数十年の間に、形状、性質ともにほとんど変化していないことである。

このように、学校生活における日常のモノと

\* 埼玉県さいたま市立柏崎小学校

\*\* 埼玉大学教育学部家政教育講座

しての上履きを研究対象とすることによって、学校生活をあらたな視点から捉えることができるのではないかと考える。また、当たり前としている日常を見つめなおすという点からも家庭教育に何らかの示唆を得るものと考えられる。

本論は、以下のような構成をとった。①上履きの歴史の変遷と使用状況を三つの側面、学校建築の歴史から、埼玉女子師範学校の写真帖から、アンケート調査からたどった。

②現在の学校教育現場で、上履きがどのように利用されているのかを、埼玉県公立小学校校長会による調査報告書を参考に考察した。①②より学校生活における上履きの歴史の変遷とその役割について整理した。

## 2. 上履き使用の歴史の変遷

本論で対象とする学校用上履き（以下上履き）は、それだけに焦点を当てて研究をなされてきてはいない。つまり、上履きに関する先行研究や資料は皆無に等しいと言える。そこで、次の3つの側面から、上履きがどのように使用されるようになったのかについて検討を加えることとする。

- (1) 学校建築史より明治以降の学校で上履きが使用されていたかを明らかにする。その際に、下履きを上履きに履き替える場所である「昇降口」に注目してその歴史をたどることとした。
- (2) 実際に上履きがどのように使用されていたのか、大正～昭和の埼玉女子師範学校の写真帖を手がかりとして考察した。
- (3) 50歳以上の方に、小学校～高校時代の上履きについてアンケートを実施し、そこから戦後の学校教育現場で使用されていた上履きの形状、使用状況を明らかにした。

### (1) 学校建築からみる上履きの使用について

#### ①江戸時代

江戸時代は、学校建築は武士階層の子どもたちが学ぶ藩校と、一般庶民の子どもたちが学ぶ私塾や寺子屋が存在していた。なかでも、私塾や寺子屋は、師匠の私宅を用いる場合が多く、庶民の住宅とはほぼ同様の和風の建築様式だった。つまり、私塾や寺子屋の中の部屋（教場）は、すべて畳敷きまたは板敷きの床であり、それらの部屋はふすまや障子で仕切られ和室であった（図1参照）。よって、建物に入るときは、教師



図1 寺子屋の風景

(小針誠 2007 P.17 脇坂義堂『撫月草』より転載)

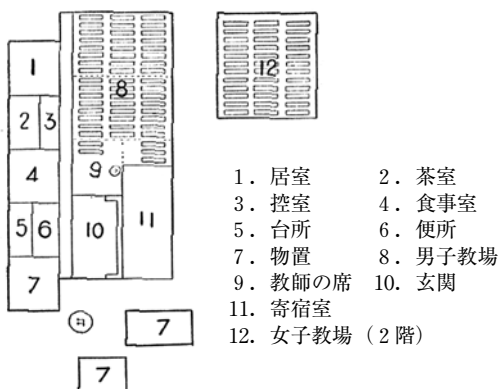


図2 寺子屋平面図【略図】

(菅野誠 1973 P.31より転載)

も生徒も玄関で履物を脱いで教場へ入っていたと考えるのが自然である。その一例を平面図で示したものが図2である。ここでは10. 玄関が広く設けられていることから、履物を脱いで教場に入ったことが推測できる。

②明治時代 学制発布以降

1872年（明治5年）の学制発布によって日本では近代教育制度が発足した。これは、国家的な意志による学校制度の始まりであり、学校建築もこれを機に急速に発展していった。

ただし、学制発布直後の時期には、学区ごとに小学校を至急建設する必要に迫られ、それまでの寺子屋や寺院、民家などを借用して学校と

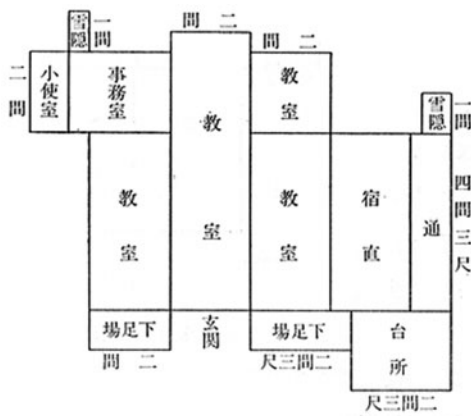


図3 旧公立学校図  
(菅野誠 1973 p.91より転載)



図4 和学校の玄関  
(菅野誠 p.196より転載)

したものが多くみられた。そのため、建物は和風様式で畳敷きであり、江戸時代の私塾・寺子屋と同様、玄関で履物を脱いで中に入っていたと考えられる。

当時の寺院を借用してつくられた小学校の例として長野県の旧公立学校を挙げるができる。旧公立学校は、栗林普賢寺という寺院を学校にしたもので、1879年（明治12年）に建設された長野県和（かのお）学校の一部となっている。この建物の平面図を図3に示した。

玄関の左右両脇に「下足場」とあり、ここで履物を脱いで置き、教室に入っていたと考えられる。また、和学校の校舎の玄関を撮影した写真（図4）によると、玄関脇に下足箱と思われる棚があり、靴を脱ぐためのすのこがあることがわかる。おそらく、和学校では、寺院を学校に転用して以降、玄関で靴を脱いでいたと思われる。

1873年（明治6年）には、文部省は学校建築指導のために「文部省制定小学校建設図」を示した。この建設図は、小学校を新しく建設する上で参考にされたもので、具体的に6種類（一字形・凹形・凸形・口形・工字形・十字形）の平屋校舎の平面形、教室や生徒控所や裁縫場などが示されている。図5にはそのなかでも後に代表的な学校建築となった一字形平屋校舎の平面略図を示した。

この図では「へ教員昇降口」が平面図真ん中に、「ト生徒昇降口」が両脇にあり、いずれも

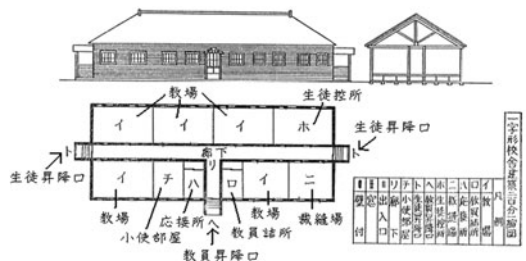


図5 一字形平屋校舎の平面略図と各部屋の名称  
(菅野誠 1973 p.96に一部加筆して転載)

廊下に入る部分に階段を上る形で設けられている。

このように、和風様式の学校が寺子屋・寺院などの借用や新築によって増える一方で、当時は洋風の学校も学校建築に取り入れられるようになった。すなわち、教育に熱心で経済的に富裕な学区では、擬洋風様式という建築様式の学校が出現した。その一例として、山梨県甲府市の睦沢学校（1875年）を挙げることができる。図7に示した平面図を見ると、生徒で入り口を入るとすぐにたたき（土間）と思われる部分があり、そのすぐ横に「土足室」という場所がある。生徒は「生徒出入口」から入り、土足室に



図6 睦沢学校 外観  
(三浦茂 2004 P.163より転載)



図7 睦沢学校 平面図（1階）  
(三浦茂 2004 P.163より転載)

下履きをおいて、教室に入っていたと考えられる。これは昇降口を通して下足箱に靴を置き、校内に入るという現在の学校での様子と同様である。睦沢小学校のように、外観に洋風の意匠を凝らした学校建築であっても、玄関で履物を脱いで入るといった習慣は残されていたと言える。

明治の新しい教育が浸透していくと、生徒数が増加し、それまでの小規模校では収まりきらず増築や新築がすすめられるようになった。そこで、1891（明治24）年には、「小学校設備準則」が出された。この準則第5条には、「校舎ハ生徒ノ帽、傘、雨衣、足駄等ヲ置クベキ場所ヲ備ウルヲ要ス。」と明記されており、生徒の足駄を置く場所つまり、現在の昇降口となるような場所が必要であると示されている。さらに、1895（明治28）年には「学校建築図説明及設計大要」が出された。これは学校建築の指導書であり、学校建築の模範を示したものである。これには、小・中・師範学校の実例（実際に存在している学校の図面）や仮想設計図が示されているが、これらの全ての図面に昇降口が設けられていること、しかも、それらの面積は、履物を履き替えるのに十分な広さがあることから、昇降口で履物を脱いでいたことがわかる。ただし、校舎内で上履きを履いていたかどうかは、明らかではない。

### ③大正時代

大正時代になり、校舎のかたちは逆L字型やコの字など運動場を囲むような定型的なものが建設されるようになった。また、初等教育の学校以外にも各地に高等学校や実業専門学校が建設されるようになり、1920（大正9）年には、神戸市内に初期の鉄筋校舎が次々に建設された。さらに、1923（大正12）年に起きた関東大震災を経て、耐震性や不燃性の必要性が認識されるようになったことで、全国的に鉄筋コンクリート造校舎が普及し始めた。図8に大正期の鉄筋コンクリート造校舎の例（東京市番町小学校）を示した。

ここでも昇降口が2カ所設けられていること

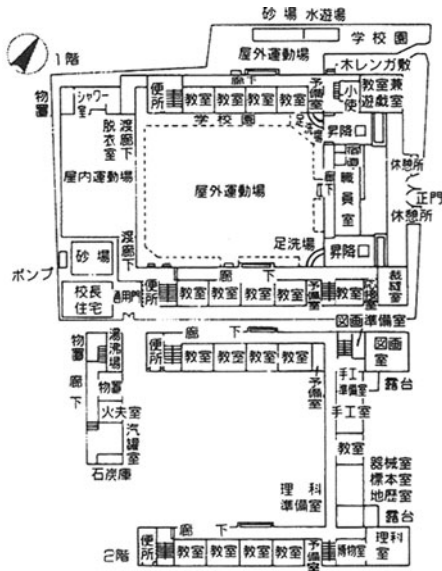


図8 東京市番町小学校  
(上野淳 2008 P.14より転載)

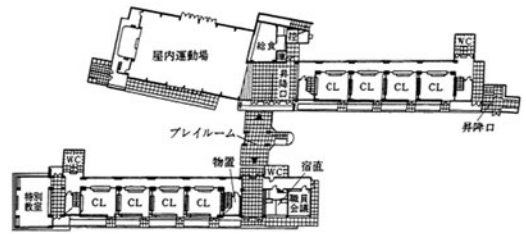


図9 宮前小学校 平面図  
(上野淳 2008 P.15より)

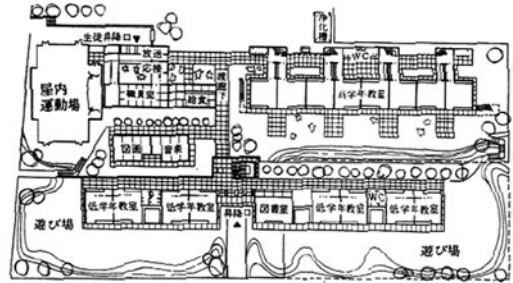


図10 西戸山小学校 平面図  
(上野淳 2008 P.16より転載)

が確認できる。それらのスペースは教室1つ分よりも広く、履物を昇降口で脱いでいたことが推察される。

#### ④昭和時代

昭和に入ると、昭和6年の満州事変より戦争の影を帯びてきた。学校建築は、資金統制及び資材統制関係の諸法令によって抑制されるようになり、ほとんどの学校が木造の校舎を建てるより他なかった。

1945(昭和20)年に第二次世界大戦が終焉すると、「戦災学校建築物復興方針」(1946年)、日本建築規格「小学校建物(木造)」(1947年)や「RC造の標準設計」(1949年)、「日本建築規格木造小学校建物」(1949年)、「鉄骨造JIS規格」(1949年)が次々に制定され学校建築は復興していった。さらに、1950(昭和25)年に建築基準法が制定され、防火地域内の学校は全て鉄筋コンクリート造でなければならないとされた。そこで、モデルスクールとされたのが東京都目黒区立宮前小学校(1955年)と新宿区立西戸山小学校(1950年)である。図9、10に

それぞれの略平面図を示す。

平面図からもわかるように、この二つの学校には共通して昇降口が設けられていることがわかる。大正期以降の平面図に示されている昇降口とは『建築学用語辞典 第二版(1993年)』によると、「学校の児童、生徒が校舎に出入りし、靴と上履を履き替える場所」、また、『建築大辞典 第二版(1993年)』によると、「大きな建物などで戸外から建物へ出入りする大きな出入口。一般的には学校の生徒が出入りし、靴を履き替える場所。」となっている。つまり、鉄筋コンクリート造りの学校建築においては、昇降口は単に靴(下足)を脱ぐ場所を示すのではなく、靴から上履きに履き替える場所であると示されているのである。

## (2) 埼玉県女子師範学校における上履きの使用

上履きの歴史の変遷を検討する2点目として、ここでは、大正から昭和初期においてどのように上履きが使用されていたのかについて、埼玉県女子師範学校を例に挙げて検討を加える。埼玉県女子師範学校を対象としたのは、この学校が埼玉大学教育学部の前身の一つであり、本学部書庫に多くの資料が現在も保管されていることによる。とくに、学校生活の様子を写した当時の写真資料は上履きの使用状況をたどる上で貴重な資料と考えられる。なお写真資料を読みとく上では、『百年史 埼玉大学教育学部』を参考にした。

埼玉県女子師範学校は、男性教師の養成が1873(明治6)年に始まったのち、女子の就学率が伸び、女性教員や裁縫科教員への需要が高まっていったことから、28年後の1901(明治34)年に、文部大臣から「女子師範学校ヲ設置シ同校ニ既設高等女学校ヲ併置スル件認可ス」と正式に認可され、創立された。旧埼玉県師範学校の校舎、鳳翔閣を使用中であった高等女学校に併置して、女子師範学校が発足したのである。

現存する埼玉県女子師範学校の写真は、主に大正末期～昭和初期および昭和10年代のものである。その多くは、校舎外での集合写真であり、外履きとして何を着用していたのかがわかる。

図11～13は、『昭和2年3月卒業記念帖』にある各学年の集合写真である。この年までの写真帖では、すべての生徒が和装(着物姿)であるが、履物を見ると、黒い靴、白い靴、草履と様々であることがわかる。また、ほぼ同時期である大正14年から昭和元年の期間に作られたと推定される『思ひ出』という写真帖には、校内及び寄宿舍での様子が写真におさめられていた。

なかでも、図14の手工室、図15の家事室、図16の通学生控室の写真からは、校舎の中で草履を履いていることがわかる。これは、同時期に出された生徒および保護者を対象とした「生徒保護者心得」に「履物 所定ノ上靴下靴ヲ用フ

ルコト」(百年史、埼玉大学教育学部)と記載されていることから、校舎の外で履いていたものとは区別された上履きであると考えることができる。

さらに、先の『思ひ出』には寄宿舍内の写真も掲載されていた。図17寮長室、図18購買部の写真からは、寄宿舍内では足袋を履いていたことがわかる。つまり、校舎では上履きを、寄宿舍では履物を脱いで足袋のままであったということが明らかである。

ただし、1944(昭和19)年4月に出された入寮生徒向けの規程には「黒短靴、下駄、上履(寮舎用及学校舎用各一)」と履物の種類が指定されていることから、この時期より後には、寮



図11 第二学年集合写真①



図12 第二学年集合写真②



図13 第三学年集合写真

図11～13 昭和2年3月卒業記念帖より  
(埼玉大学教育学部蔵)

でも上履きを用いるようになったと思われる。

さらに、写真資料を見ていくと、1927（昭和2）年以降の生徒の服装については、和装のみ、和装と洋装の混在期、洋装のみと移行していることがわかった。『昭和6年3月卒業記念』の集合写真は、図19および図20に示したように、第二学年の生徒の服装は和装と洋装が混在し、履物も様々である一方で、第一学年の生徒の服

装は全員が洋装で履物も全員靴になっている。このことから、1930（昭和5）年度入学生から標準服が洋装になったと考えられる。

この時期にも上履きを使用されていたが、どのようなものであったかは、写真資料では明らかではない。唯一学芸会の写真（講堂）で、戸外ではくような運動靴を皆がはいている。これは、講堂の舞台上であることからすれば、戸外



図14 手工室



図15 家事室



図16 通学生控室



図17 寮長室



図18 購買部

図14～18（埼玉大学教育学部蔵 写真帖『思ひ出』より）



図19 第二学年集合写真



図20 第一学年集合写真

図19～20（埼玉大学教育学部蔵 昭和6年3月卒業記念より）



図21 職員室（一部）



図22 職員集合写真（一部）

図21～22（埼玉大学教育学部蔵 写真帖『思ひ出』より）

の運動靴または革靴の汚れをおとしてそのまま着用していたとも考えられ、または日常的に履き古した運動靴を上履きとして使用していた（埼玉県高等女学校卒業生からの聞き取りより）とも考えられる。

さらに、『思ひ出』には教員の履物についても興味深い写真が掲載されていた。

図21の写真は、職員室の様子を写したもので、右手前の男性教師の履物を見ると、スリッパのような足の甲にだけ引っかける履物を履いていることがわかる。同じ写真帖にある図22の職員集合写真では、屋外では革靴を履いていたことが示されていることから、教員も校内ではスリッパのような別の履物に履き替えていたことがわかる。

### （3）上履き使用に関するアンケート調査

実際に上履きはどのようなものが使用されていたのだろうか。写真からは、学校の中では外履きを脱ぎ上履きを使用していたことが明らかになったが、上履きそのものがどのような形状、材質のものであったのかについて、具体的な情報を得るために50歳以上の方を対象にアンケート調査を実施した。50歳以上の方を対象としたのは、予備調査（聞き取り）の結果、40歳代後半の方が小学生であった1960年代以降は、現在の上履きに近いものがほとんどであったこと、

1950年前後の時期は地域によって学校建築にも差が見られることからである。調査方法としては、アンケート用紙に直接記入してもらう形で行った。調査対象は、主に埼玉大学家政専修の学生のご家族及びその知り合いの方、埼玉県下の小学校の先生方で、46名の方にご回答いただいた。調査内容は、属性（性別、生年、地域など）、上履きに関する項目から成る。特に上履きに関する項目では、校内で履いていた上履きの種類についてそのかたちを「バレエシューズタイプ」「前ゴムシューズタイプ」「サンダルタイプ」「その他」という4種類のうちのどのタイプか回答していただいた。なお、これらの調査項目は小学校時代、中学校時代、高等学校時代それぞれの時期について回答を求めた。ここでは回答に顕著な傾向がみられた小学校時代に使用した上履きの種類を表1に示す。

戦前に生まれた12名の方は全員、校内で裸足または足袋・草履などを履いていたことが明らかになり、今日の学校で使用されている上履きを履いていなかったことがわかった。この12名のうち、裸足で過ごしていた人は7名（うち1名は冬は足袋を着用）で、上履きとして草履を使用していた人は5名という結果だった。

また、戦後に生まれた方を1954年を境に二つに分けると、それぞれ多く使用された上履きのかたちが、前ゴムシューズからバレエシューズ



表1 小学校時代に使用した上履きの種類

生まれた年	入学年	上履きの種類
1918～1945 12名	1925～1952	裸足：7名（冬は足袋） 草履・縄草履：5名
1946～1954 13名	1953～1961	前ゴムシューズ：8名 バレエシューズ：3名 その他：2名
1955～1958 21名	1962～1965	前ゴムシューズ：3名 バレエシューズ：15名 その他：3名

(調査対象46名)

へと移行していることがわかる。上履き製造メーカーの一つである株式会社ムーンスターの社史によれば、児童用の前ゴム靴は外履き用として1927（昭和2）年から製造が開始され、1958（昭和33）年にバレエシューズタイプの上履きを発売したとある。また、アキレス株式会社の社史によれば、1957（昭和32）年から学童用シューズ（前ゴム布靴）を試作し、1968（昭和43）年にバレエシューズの大量生産を開始したとある。

つまり、戦後すぐの時期は、外履き用の学童靴として発売されていた前ゴムシューズタイプの履物が上履きとして流用されていた。さらに1960年前後にバレエシューズが上履き用として生産・販売されるようになり、それ以降、大量生産されるようになって普及し、前ゴムシューズに取って代わったと考えられる。

### 3. 学校教育における上履きの役割

学校教育現場では、上履きを単なるものとは見ていない。むしろ、生活指導上の重要なモノとして活用している。このことが、平成20年2月に発行された『平成19年度 調査報告 教育課程の実施に伴う学校経営上の課題 各学校で特に効果のあった取組編』（埼玉県公立小学校校長会、教育課程委員会発行）に顕著に示されていた。以下にその概要を示す。

表2 規律ある態度を達成するために効果のあった取り組み

「あいさつ」	206校（25.1%）
「早寝早起き朝ごはん」	100校（12.2%）
「清掃」	62校（7.6%）
「時間を守る」	61校（7.4%）
「はきものを揃える」	85校（10.4%）

『平成19年度 調査報告 教育課程の実施に伴う学校経営上の課題 各学校で特に効果のあった取組編』（埼玉県公立小学校校長会、教育課程委員会発行）の一部を整理し作表

本報告書は、平成18年度に埼玉県及びさいたま市が全県的に掲げた「教育に関する3つの達成目標」にかかわる調査研究の報告であり、県下の公立小学校820校に対して調査をおこなったものである。ここでいう3つの目標とは、Ⅰ『学力』（さいたま市では『学びの向上さいたまプラン』）、Ⅱ『規律ある態度』（同『子ども潤いプラン』）、Ⅲ『体力』（同『ジョイフルスポーツプラン』）を指す。本調査の回答者は各学校の校長先生である。

回答方法は、この3つの達成目標において、特に効果をあげたと思われる取り組みを選択し、それについての具体例を箇条書きで記述するというものである。ここでは、Ⅱ『規律ある態度』に関する考察に『生活習慣改善の指導に関しては、「あいさつ」「早寝早起き朝ごはん」「時間を守る」「はきものを揃える」「清掃」への取組が多かった。』という記述があることから、これら5つの取り組みについて回答数を表2にまとめた。

ここに示したように、学校内の履物に焦点を当てて「はきものを揃える」という生活指導をしている学校は「あいさつ」「早寝早起き朝ごはん」の指導の次に多いということがわかった。

つまり「はきものを揃える」ことで規律ある態度の育成をはかっていると回答した学校は全体の1割以上になる。これは、5つの項目中の「時間を守る」及び「清掃」指導を挙げた学校

よりも多く、はきものを揃えることが生活指導上の重要な指導項目であると言える。また、「はきものを揃える」と回答した学校は、ア「生活指導改善の指導」、イ「授業規律の充実」、ウ「家庭への要請」のどの項目にも回答例を挙げており、学校においては、下足箱を使用する場面やトイレを使う場面、授業の充実を図る場面など学校の様々な場面においてはきものを活用して規律ある態度の育成に取り組んでいること、学校のみならず家庭とも連携して指導していることを示している。

また、はきものを揃えるという行為は、日常の学校生活では些細なことであるが、このことを生活指導の中で6年間積み重ねていくことによって、落ち着いた生活態度を身につけさせることを目指していると言えよう。学校教育現場においては、上履きが毎日使用するモノであることを利用して効果的な指導を行っていると考えられる。言い換えれば、上履きは生活指導上重要なモノであり、生活指導の重要なツールとして活用されているのである。

#### 4. 上履きの使用の変遷とその役割

ここまで見てきたように、学校という建物の中に入るとき、つまり学校建築においては、外履を脱ぐということを学制が発布して以来130年以上の間行ってきた。これは、擬洋風様式の学校建築においても継承され、とくに大正期以降は、昇降口で外履きを脱いで下足箱に入れ、上履きを履くということが学校文化の中で受け継がれてきた。これは日本家屋における二足制という生活文化の特徴に由来し、現在でも、子どもたちにとって日常的な習慣として身に付いているものである。

このように上履きに履き替えるという行為は、生活文化に根ざしたものであるが故に美しく揃えるということが重視され、生活指導に活用されていったと考えることができる。

また、埼玉県女子師範学校の例からは、履物

を規定し、規則を遵守させることが生活を律することにつながると考えられていたことがわかる。おそらく、履物をそろえることとともに生活指導上重要なツールとして上履き、外履きの区別が利用されていたと考えられる。

さらに、埼玉県小学校校長会の報告書からも、はきものを揃えるという生活指導が現在の教育活動においても効果を挙げている実態が示された。

以上のことから、上履きは、単に日本の住宅文化に由来した学校文化におけるモノとして位置づけられているのではなく、このような日本独自の学校文化において生活指導上のツールとして重要な意味を持つモノであると位置づけられているということができる。

学校現場では服装の乱れが心の乱れであるとよく言われるが、上履きのかかとを踏んではいる児童生徒に対する生活指導はとくに重視される傾向にある。つまり、規律正しい生活をするためのツールとしてだけではなく、身につけるものとして、個々の児童生徒の状態を判断するツールとしても利用されているのである。このことからすれば、上履きは学校文化において単なるモノ以上の、生活指導上のツールとして、また個々の児童生徒の状況を把握する重要なツールとして機能していると言えるのではないだろうか。

だからこそ、機能性はほとんど重視されないために材質や形状は変化する必要がなく、1960年代以降ほぼ同様の形と素材のものが使用されてきていると考えられる。

また、小学校から中学、高校と成長するにつれ、上履きの使用状況が悪くなるのが一般に知られており、生活指導上のツールとしての機能も低下する。さらに、昨今では上履きの白い布地部分に思い思いのイラストを描画する高校生も見られ、一つのブームとなっている。上履きを使用するというあたりまえの学校生活における文化が、児童生徒にとってはどのように受取られているのか、また本来の二足制の文化が

どのように変質していつているのか、今後の研究課題としたい。

#### 参考文献・引用文献

アキレス株式会社 1997『アキレス50年史』大日本印刷株式会社  
天野正子 2007『モノと子どもの戦後史』吉川弘文館  
平井聖 1998『生活文化史』放送大学教育振興会  
菅野誠 1973『日本学校建築史＝「足利学校」から現代の大学施設まで＝』文教ニュース社  
小針誠 2007『教育と子どもの社会史』梓出版社  
古茂田甲午郎ら 1935『高等建築学第20巻奥付』常磐書房  
小山静子 2002『子どもたちの近代：学校教育と家庭教育』吉川弘文館  
黒羽亮一 1994『学校と社会の昭和史』第一法規出版  
教育解放研究会編 2000『学校のモノ語り』東方出版  
三浦茂 2004『幻の学校をたずねて』早稲田出版  
文部省 1954『学制八十年史』  
長倉康彦ら 1983『新建築学大系29 学校の設計』

彰国社  
日本建築学会 1989『建築設計資料集成6 建築一生活』丸善株式会社  
埼玉大学教育学部百年史編集委員会 1976『百年史 埼玉大学教育学部』百年史刊行会  
埼玉大学教育学部所蔵『昭和2年3月卒業記念帖』『昭和6年3月卒業記念帖』『思ひ出』  
埼玉県公立小学校校長会 2008『平成19年度 調査報告 教育課程の実施に伴う学校経営上の課題 各学校で特に効果のあった取組編』教育課程委員会発行  
佐藤秀夫 2002『教育の歴史』放送大学出版  
竹内途夫 1991『尋常小学校ものがたり：昭和初期・子供たちの生活誌』福武書店  
月星ゴム株式会社 1967『月星ゴム90年史』凸版印刷株式会社  
辻本雅史 2002『教育社会史』、沖田行司編山川出版社  
上野淳 2008『学校建築ルネサンス』鹿島出版会  
横須賀薫・千葉透・油谷満夫 2008『図説 教育の歴史』年河出書房新社

(2009年3月31日提出)

(2009年4月17日受理)

# The History of the Use of Indoor Shoes in School Life

Tomomi YOSHIDA and Miho KAWAMURA

Keywords : Indoor Shoes, School Life

The aim of this study is to explain the historical change of indoor shoes and their role in school life.

Three points were used in researching about indoor shoes, because there have been no previous studies.

- (1) Explaining how the use of indoor shoes was influenced by the architecture of the school buildings from the Meiji era to the present, paying special attention to the school entrance.
- (2) Researching the use of indoor shoes using pictures of Saitama womens' teacher's school.
- (3) Taking a questionnaire for people above 50 about indoor shoes in their schooldays and explaining the role of the shoes.

Japanese students have been removing their shoes at the school entrance for 130 years, from when the educational system started to the present.

The custom of removing shoes at the school entrance, putting them into boxes, and changing into indoor shoes first appeared during the Taisho era. This custom originates from everyday life in Japan and was used as a teaching tool.